

アユ冷水病の発病要因について

宇野 悦央

冷水病を防止するためには、発病要因を知ることが重要である。このため、約1ヶ月以上調子の良かった養成アユが冷水病に罹病した事例について、主に業者からの聞き取りをもとに発病要因を調査した。

材料および方法

冷水病の発病事例は1995年1～8月に確認された7例で、その状況を表1に示した。種苗の種類

表1 冷水病の発病事例

事例 No.	発病 確認日	種 類	種 苗 入池日	水 温 (℃)	平均体 重 (g)	飼育池 (m ²)	飼育密度 (／m ²) (尾)	飼育密度 (／m ²) (kg)
1	'95.1.23	湖 産	'94.12.25	17	5	100	300	1.5
2	2.20	〃	不明	17	1	100	2,800	2.8
3	4.07	海 産	'95.02.27	16	4	100	1,500	6
4	4.23	湖 産	'94.12.04	16	40	78	350	14
5	5.09	人工産	'95.01.20	16	20	78	250	5
6	5.17	海 産	02.25	17	15	150	400	6
7	8.22	人工産	自家生産	17	75	100	50	3.8

は湖産（3例）、海産（2例）および人工産（2例）であり、発病時の養成水温は16～18℃、魚体の大きさは1～75g、飼育密度（／m²）は50～2,800尾（1.5～14kg）であった。事例No.2, 3は密度が高いと思われ、事例No.7はかなり低い状態であった。なお、種苗導入時における病原菌の保菌状況は調査していない。

結果および考察

各事例における発病要因と処置等を表2に示した。発病要因は取扱いによるものが6例（選別5例、分養1例）で最も多く、他には発病池水の飛沫が混入した1例であった。*Bergy's manual* 第9版によれば、冷水病菌は淡水由

表2 冷水病の発病要因と処置等

事例 No.	発病要因	日間へい 死率 (%)	発病後の 処置 (経過)
1	取扱い (選別)	0.67	投薬 (へい死減少)
2	〃	0.01	〃
3	〃	0.003	〃
4	〃	0.74	塩水浴 (へい死減少)
5	取扱い (分養)	1.5	投薬 (へい死減少)
6	発病池水混入	0.07	投薬 (不明)
7	取扱い (選別)	2.0	不明

来のもので海水中では発育できないとされ、海産種苗は冷水病菌を保菌していないものと推定されるが、本事例では海産種苗の2例（No3, 6）で発病がみられている。事例3の場合は活魚輸送車の出入が多く、活魚水槽等を通じて冷水病菌が持ち込まれたとも考えられる。また、事例6では発病の1ヶ月前に幅10m程度隔てて養成されていた発病池の飛沫が混入したことによるものとみなされた。分養による事例（No7）では、サイフォン方式で行ったにも関わらず元池で発病がみられた。なお、海産種苗については発病要因は不明であるがこの他に2例の事例がある。

次に、発病に対する処置についてみると、投薬が5例ありそのうち4例ではへい死の減少がみられ、また塩水浴（No4）で同様な結果となっている。

このように、冷水病は種苗に関わらず発病がみられ、発病要因としては魚の取扱いによるものが最も多く、通常の飼育管理で容易に発病することが判った。